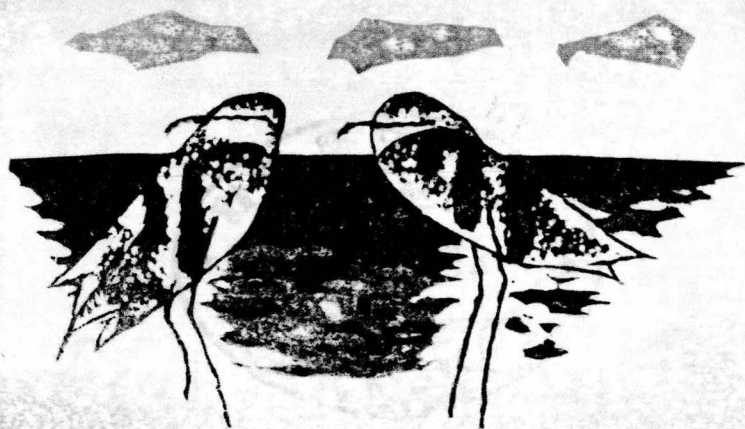


枯木の周辺

水上 勉



中央公論社

枯木の周辺

検印廃止
©一九七〇

定価五〇〇円

昭和四十五年六月二十日 印刷
昭和四十五年六月三十日 発行

著者 水上 勉

発行者 山越 豊

印刷 三陽 社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四

目次

枯木の周辺

こおろぎの壺

櫟の花

アメリカの雲水さん

露

あとがき

装
幀
関
野
準
一
郎

枯木の周辺

宇野浩二先生が亡くなられたあとで、私にたずねる人がいた。「先生は性不能者じゃなかったですか」これには多少面食らったが、私も正直、先生は不能だったかもしれないと思つたことがある。断定する根拠があつたわけではなかった。相手の女性からきいたわけでもないし、だいいち、その人が性不能かどうかなんて本人にしかわかりやしない。女性にだつてわからない場合もある。私はそれらの質問に、「さあ」とか、「そうかもしれないね」とか、こたえたりした。

のつけから妙なことを書いてしまつたが、先生の死後、性不能云々の詮索は文章にまでなつて、問題にされた。私は宇野浩二研究に、そのような詮索が重要であるかどうか知らない。いつておくが、私は、五十五歳以後の先生しか知らないし、五十五歳といえ、もう女から遠ざかりはじめる年齢である。私だつて、五十五になれば、性不能になるやもしれない。

さて――。昭和二十四年のことであつた。先生は五十八歳、私が三十歳の二月だつたかと思ふ。ふたりは熱海へ旅行した。前夜は湯河原の中西に泊り、翌日汽車で熱海へきて、十日ばかり露木つゆぎ

という町なかの旅館に泊った。当時の旅宿は、米か外食券持参でないと、断られた。露木は、私の義弟の戦友が番頭をしていた縁故から、外食券なしの特別客としてうまく交渉できた。そのために先生もこの宿を承諾されたのであったが、きてみると、戦前に先生は一度この宿に泊っておられたことがわかった。だが、どういうわけかその時は、先生ははじめて泊る顔をしておられた。離れは本館の前の小さな門を入ったところで、小部屋が五つぐらいあった。庭は狭くて、竹垣の向うは糸川である。町なかの川に似あわず、岸が高く、流れも急なので、せせらぎがきこえた。岸の片側町は糸川遊郭であった。

私たちが泊った部屋の廊下に簾椅子が出ていた。椅子にもたれて休んでいると、客をよびこむ娼妓の声がきこえた。二十四年といえはまだ戦後の混乱の最中で、復員服を着た若者や、闇屋がこの町へも流れていた。庭をさえぎる竹垣も、くさりかけて、ところどころ大きな穴があいていたので、向う側の通行人がよく見えた。

私は部屋に入ってからすぐ垣向うの雰囲気を感じとっていたが、宇野先生は、気づいておられないようであった。私たちが熱海へきたのは、先生の口述筆記を私がうけもっていたからである。私は新潮社という、つぶれかかった出版社につとめていて、先生の小説をいただくことになっていたが、なかなか先生が書いて下らないので、困った。「もし、あなたが筆記して下さるのだったら」と先生の方からいわれたので、さっそく、森川町のお宅に伺ったところ、自宅では

来客が多いから、どこかへ湯治がてら、ということになって、湯河原の中西を目ざしてきたのだ
ったが、その中西がなんとなく騒がしいという理由で、ここまで足をのばしてきたのであった。
先生は、宿へつくと、すぐ、女中に蒲団を敷かせて按摩をとられた。私は廊下の椅子に坐って、
按摩のすむまで、川向うの竹垣越しの嬌声に耳をかたむけていた。按摩がすんで、すぐ口述がは
じまるというわけではなかった。だいたい一日に半ペラ（二百字詰）三、四枚が限度である。先
生に口述の気分が出て、「さあ、やりましょうか」といわれるまで、待機しているわけだった。

二日も三日も、一枚もすまずに待つことさえあった。私の社は、B社やS社のように、一流の
文芸出版社ではなかった。先生がB社やS社の仕事を持っておられる、それらの仕事の合間
をみて、私が、巧みに潜り込んで筆記しなければならない。だいたいが無理な注文をしているの
だから、こちらに負い目がある。一日に半ペラ三枚の原稿をいただいても、私はトクとしていた。

その日は、いくらか口述も進んで、枚数にハカがいった。四時ごろだったかと思う。縁側へ出
て、陽のさしこむ庭を見て休んでいると、竹垣の向うにシュミーズだけの若い女がみえた。同輩
と話しあっていたのが、急に川岸にくるとこちへ向けて、しゃがみ腰になった。先生と私の視
線が偶然、竹垣の向うへ釘づけになった。女は放尿しはじめた。白い股をひろげて、つまり、岸
から糸川へ向けて、絹糸をおとすように、白しぶきをあげて放尿した。竹垣の穴から、女のあら
れもないそれがはっきりみえる。まさか、覗き見されているとは知らない女は、真剣な眼ざしで、

かなりな時間をかけて、無心に放尿した。

私はこの時、一瞬だけ眼をそらせて、先生の方をみた。宇野先生は不快そうにだまっておられた。まったく、無関心な顔といえた。しかし、私はまた竹垣の方へ眼をもどした。女は、シュミーズの裾をおろして走り去っていった。宇野先生は、いつまでも、竹垣に眼をやっている私を怒ったようにみておられたが、

「さあ、やりましょうか」

とおっしゃった。いまになつて思うに、先生はこの時、みだらな眼さしを見せたりはなさらなかった。ことばには、多少私をたしなめるひびきがあった。偶然に見た若い女の放尿姿は、いかにもあけつひろげで、私には、滑稽というより至極艶にみえた。当時まだ、糸川の女たちは、下ばかりきなどつけていなかった。衣類も粗末なのが多かった。街娼もいたから町には特殊な雰囲気があり、その女たちの匂いはカン高い嬌声にのって竹垣根ごしに宿の庭へ流れてきた。この旅館に泊った十日間、嬌声は朝から夜おそくまでつづいた。しかし、宇野先生は、まったく無関心であった。一日に半ペラ三、四枚の口述をつづけはするが、大半の時間は按摩と文学談義である。その文学談も、将来の新しい文学についてではなかった。すべてむかしの話である。芥川龍之介、三上於菟吉、直木三十五といったような故人の名ばかりが出た。私は、それらの話をききながら、先生が垣根ごしの糸川町にまったく無関心なのが不思議でならなかった。戦後の温泉の遊里ほど、

複雑で、日に日に変貌をとげてゆく町はなかった。私には大きな興味があるのに、先生にはまったくないのであった。

これは、「苦の世界」や「軍港行進曲」や「山恋ひ」の作者としてはあり得ないことといわねばならなかった。不思議であつた。私は、先生が、もつと女や、女たちの住む家に関心があつていいはずだと思つた。

女の放尿にまつたく無関心だつたということは、なにも女に関心がなかったということにはならないかもしれない。先生とて、糸川へ小水をした女の姿はおもしろかつたに相違あるまい。だが、先生は、それを顔に現されなかつた。反対に、もみあげのながい顔を、不快そうに歪め、澄んだ瞳を据えて、なかなか自分からいい出さない「さあ口述をはじめましょうか」ということばを発せられたのである。女のことに関しては、感情を素直に出さない性質の人ではなかつたかと、今日になって思うのである。

先生は、じつは、この宿へきて糸川町に多大な関心があつたと思われる。温泉町へ出かけても、その宿泊先の吟味にうるさかつた先生が、その日、私の家内の弟の關係をたよつてきた露木に二つ返事で承諾をあたえられたことと、さらに自分から「離れ」を所望されたこと、しかも過去に一度きいているのを秘しておられたことなど考えあわせると、そうとしか思えない。一日に三、四枚の口述しかなさらないのだから、私には大半は無駄な時間ばかりである。按摩と文学談では退

屈するのだ。先生が口述をしぶっておられる理由は、早く原稿を終りたくないからであった。原稿がすめば宿を出てゆかねばならない（宿代は出版社持ち）といったような考えのあることもわかっていたが、それだけではない、横着な、持ち前のものぐさもあった。そのうえ、糸川町に関心があったはずだ。しかしそれは私に見せてはならないものであった。人にいえない陰微な観察の喜びであった。そうでなければ、あの女の放尿の瞬間、にわかに視線をそらせて「さあ、やりましょう」などといわれるのは合点がゆかない。

私はその頃から宇野先生の挙動にある関心をもつようになっていった。

2

信州松本の疎開先は、造り酒屋であった。銘柄は忘れたが、この醸造元は何回も訪ねたので、家ははっきり覚えている。「思ひ出の家」や「思ひ草」に登場する家である。市内を流れる女鳥羽川の橋たもとにある大きな酒問屋で、先生の借りておられた家は、その隣にあった。格子造りの古びた家で、当時は、松本も住宅難だったが、浦和の屋根裏に夫婦子供の三人暮らしをしていた私には、ずいぶん贅沢な家に思われた。表も二階の窓も、格子がびっしりとはまっていた。障子がくすんでいるので、家の中は暗かった。先生は二階を寝室兼書斎にして、階下の表の間を客間にしておられた。漆でも塗ってあるのか、黒光りした樺材の階段には、鉄把手のついた抽出しが

ついていて、上り下りのたびにぎしぎし鳴った。たいがい客は、階下の表の間で会談して帰ったが、私はいつも二階へあがった。口述筆記の必要があったからである。といつても、この暗い二階で、口述筆記がはかどった記憶はない。とにかく、カビくさく、埃くさく、天井も床も蜘蛛の巣だらけだし、床一面、乱雑に本が積み重ねてあるので、とても、原稿が書けたり、口述が出来たりするようなところではなかった。だが、先生は、この二階へ帰ると、埃だらけの中で、旅館でもそうされていたように、蒲団を敷いてすぐ按摩をよばれた。

先生の用事を仰せつかって、段取りよく、小まめに立ち働いている女がいた。鈴木コウという人である。前年に松本の疎開先で亡くなったキヌ夫人の従妹^{いとこ}だった。実際、鈴木コウという人はまめによく働いた。背が低く、貧弱で、耳のうすいちんまりした顔だちは、どこことなく薄幸な感じで、最初会った時から、眼に焼きついてはなれなかった。先生が東京から帰ってくると、コウさんはまるで、道楽息子が強情親爺を迎えるように、なかばおびえをふくんだ眼に、かすかななごみをみせて、食事の用意をしたり、按摩をよびに走ったりしていた。

私はこの家には泊らなかつた。駅前の飯田屋という商人宿に泊った。そこに決めたのは、宇野邸がもっとも近かつたためである。私が困難な口述に出張した旅の日で、もっとも思い出ふかいのは、二十二年の冬の十五日間だった。相かわらず先生の口述はすまなくて、会社から「モウイラヌ、スグカエレ」という電報が届いた。旅館代を十五日分も支払って、出来る当てのない口

述原稿に精出している私は、社長からにらまれはじめた。文潮社は翌年につぶれているのだから、つらい最中だったと思う。私は追いつめられた気持で、乗りかけた船だ、最後までがんばって、原稿だけは完結させてもらおうと真剣になっていたが、しかし、埃だらけの暗い部屋で、先生の口述は、一日に三、四枚以上はすすまない。四十枚の小説の完成は並大抵ではなかった。毎日、私は夕方になると、コウさんが食事の用意をしている階下を通って表へ出る。夕食は宿でたべることになっている。五日目ぐらいだったろうか、

「水上さん、ちょっと」と小声で、コウさんが私を追いかけてきた。珍しいことだった。コウさんは、客とあまり話をしなかったのだ。それがその日私をよびとめて、受唇をつき出すようにして、ひくい声でいった。

「すみませんね、義兄は横着で……みていて、水上さんが気の毒でなりませんよ……ほんとに、毎日、寒いのにすみませんね、これ、配給のお酒です。誰も呑むものがいまませんから、あんた、飯田屋へ帰って呑んで下さいな」

二合壺の酒を新聞紙にくるんで、かくすようにして私のオーバーのなかへねじこむのである。私は、コウさんが黙っているようでも、私の苦衷を知っていてくれたことがわかって、温かいものを覚えた。遠慮なく頂戴して外へ出た。

雪が降っていた。私は酒を抱いて飯田屋へ帰り、その晩は二合の酒に酔って、ふらっと、雪の

町を散歩してみたくなった。飯田屋と宇野邸を結ぶ中ほどに、飲屋街があり、そこに横田町とかいう遊郭があった。私は、無聊な気持ちでもあったし、ほろ酔いでもあったので、つい、その町へ入ってみたくなった。穢らしい遊郭で、軒のひくい、格子戸の家がならんでいて、雪の吹き込む戸口には、年増女が、襟まきで鼻先を包んで、客をよびこんでいた。私は、その一軒の四十年輩の妓に眼をとめた。いわゆるショートタイムというあいびきである。天井のひくい二階の部屋で、寒々とした蒲団にくるまっていると、宇野先生の寝姿がうかんだ。一日に半ペラ三枚か四枚しか口述しない先生の顔がうかんだ。安化粧した妓とのあわただしい享樂は覚えていないが、先生の口述がすまないために、いくらか自棄になっていた思い出は今日もつよい。

私は、妓と淡雪のようなちぎりを結んでわかれたのだった。外へ出ると道には雪が積っていた。飯田屋まで十分ぐらいの道のりだったが、急いで帰ってくると、帳場の女中が、

「先生がお見えますよ」

といった。私はぎよつとして、二階の部屋へ走りこんでいった。宇野先生は窓にもたれて、ぼつんと外をみておられた。外はガラス窓を通して、横なぐりに降る雪だ。

「散歩ですか」

と先生はいった。

「はい」と私はいった。

「酒くさい……酒くさい」

先生は鼻の先で大きな手を振られた。戸口に立っている私の口臭がそんなに早くそこまで届くはずはない。すると案の定、

「あのひとはね、まめな人で、酒の配給があると、石鹼にとりかえてもらったりするんですよ」
私に怒っているのか、コウさんをなじっているのかわからなかったが、君に吞ませた酒は勿体なかったといわれているようにもきこえた。私は黙っていた。すると、

「この雪の中を……どこへ散歩でしたか」

「遊郭です……」

と私はこたえた。先生はむっとしたような顔をそむけられた。窓の外の雪をじっとみておられた。先生も雪見に出てこられたのかもしれないと思った。

翌日、コウさんは、私が土間に入ると、

「水上さんは、大酒呑みで、女あそびが好きだ……あの人に、二合ぐらいの酒を吞ませたってなんにもならない……まるで、亀みたいな人だというんですよ。石鹼がほしかったんですよ」

ちんまりした顔をしかめて、コウさんは初めて私に陽気な表情をしてみせた。私は、次第に、このコウさんと内証話をするようになった。